

The First
Glocal
Magazine

Tokion

トキオン・ジャパン

7

no.60

550yen

GLOCAL SPOT

パレ・ド・トーキョー / ハリ
必見のアートセンター、
徹底取材!

Interview

カーラ・ブルーニ
スーパー・モデルのソングブック

Mode

ジョン・ローレンス・サリバン
ジャケットにこめた美学

TOKION USA

ニューヨーカーが見た
“森山大道”

ALL about HIROSHI FUJIWARA

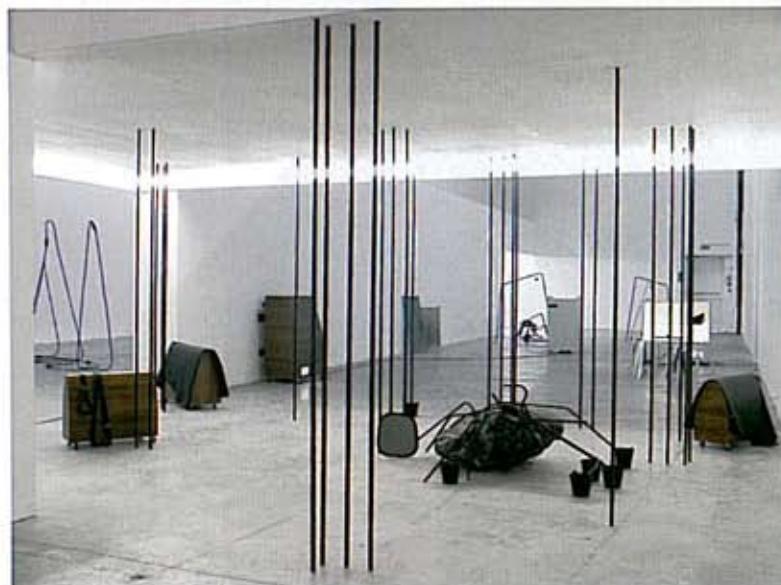
藤原ヒロシのすべて



The Palais site for the contemporary arts

パレ・ド・トーキョー
いまのアートのかたちを創る

Text_YUKA TOKUYAMA



「Talianna Trouvé, Double Bind」01 FEB-11 MAR 07



「MUSIC FOR PLANTS, A project by Peter Coffin」
01 FEB-11 MAR 07



「GROW YOUR OWN,
A project by Peter Coffin」
01 FEB-06 MAY 07

パレ・ド・トーキョーは美術館ではなく「現代創造サイト」というその名にはアートすら見当たらない。美術館ではないのはコレクションを持たないためで、敢えてアートセンターと名乗らないのは実験的な表現を可能にする、いわばアーティストの創作の場、そして出会いの場としてありたいという開館当初からの意図である。こうした意図をもたらした契機を探るなら、ここでパリの現代美術事情を素早く俯瞰する必要があるだろう。

たとえば昨年再開したパレに隣接するパリ市立近代美術館では、評価の安定した作家（ピエール・ユイグ、ドミニック・ゴンザレス・フォレステル、さらにフィッシュリ&ヴァイス）の個展等に加えて、コレクションでも20世紀初頭パリに始まり現代の作家による最近年の新作まで網羅し、着実に近代以降のヨーロッパ美術の歴史を紡いでいくという美術館の意志が見てとれる。今年開館30年を迎えるポンピドゥ・センターでは、コレクション展や大規模なテーマ展はもちろんのこと、

今活躍中の中堅作家の新作を紹介、さらにシネマや演劇、ダンスとまさに充実したプログラムだが、規模が大きすぎるため館全体のディレクションは見えづらい。カルティエ現代美術財団では、日本人作家では東芋や横尾忠則、あるいは映画監督デヴィッド・リンチのデッサンやペインティングを紹介するなど、こここのところ個展のシリーズが目立つが、内容によっては大味なことも。近年目が離せないのは、バスチューのメゾン・ルージュ。質の高い個人コレクションの紹介とヘンリー・ダーガーや工藤哲巳など個性的な選択の展覧会で躍立っている。この他にもルーヴルやオルセーなどでも現代美術作家によるコレクション展示などがみられる。

ところがこれらはいずれも、プログラムの内容によって多少の差はあるにしても、完成した美術作品の鑑賞の場という、しいていえば一定の距離を置いて「見る」、静的な美術館的空間である。これに対してパレ・ド・トーキョーでは、むしろこうしたアートの閉鎖的

なイメージを打ち破るべく、サブカルチャーに親しんだ若者や小さな子どものいる家族連れも惹きつける様々な要素を取り入れた「創造の場」となることが望まれたわけである。そこでパレは、観客体験・参加型作品、ワーク・イン・プログレスな作品に加えてこうした展示からバーやレストランまで地続きの開放的な空間、DJやファッショニイベント、さらに連日夜12時まで開館などの“非”美術館的要素で、ある種トレンドィなプレイランド、アート系クラブのような様相を帯びてきた。開館から5年、一方でカオス的ともいわれたこうした開放的な方向性を引き継ぎつつも、昨年から着任したディレクター、マーク・オリヴィエ・ワレーによって、パレでは新しいディレクションが打ち出されている。

アートそのものの意味を問い合わせ「日常的なものがアートに変貌する」可能性に魅力を感じるというマーク・オリヴィエは、アート界のみにとどまらず、科学やス

パレ・ド・トーキョー
Palais de Tokyo
13, av. du President Wilson 75016
Paris
Tel +33 1 47 23 38 66
12 : 00 ~ 0 : 00 月曜休館
アクセス
Metro : Iéna or Alma-Marceau
stations (line 9)
RER C : Pont de l' Alma station
Buses : 32, 42, 63, 72, 80, 92

Tokyo,



[Michael Blazy, Post-Punk | 01 FEB - 06 MAY 07]

ポート、雑学等、あらゆる分野からの刺激を通してアートを捉えなおしたいという。例えば昨年9月の展覧会オープニングイベントの木こりによる木彫コンテストやミニバイク・モーターショーに始まり、降霊術と催眠術とアート、量子力学、幻覚作用のあるサボテン…等々のコンフェランスの題目をみるだけでも、いわゆる現代美術の枠組みのなかだけで思考するのではなく、身のまわりをとりまくものへ興味と直観から展開する発見と経験のなかからアートを探求しようとする態度が見てとれる。

ところで日常文化といえば、昨年パレ・ド・トーキョーのセーヌ川対岸にオープンしたケ・プランリー美術館。近世以降フランスが非ヨーロッパ文化圏から集めてきた数々の日用品オブジェ群の魅力には時を忘れて眼を奪われる。とはいって、ジャン・ヌーヴェル設計の青々と繁る植栽とアースカラーの建築によって熱帯林を想起させるプランリーには、少なからず植民地

主義的な視線が垣間見え、やはり居心地悪さを感じるのに対して、パレでは、異質な要素を他者として隔てることなく取り入れ、共有することによって現在の創造の糧にしようとする態度がいかにも心地よい。

振り返ってみれば、こうした西洋美術の伝統から離れたところにインスピレーションを求める態度は、20世紀初頭パリに花開いたアヴァンギャルドのそれときわめて親しい。マルセル・デュシャン、マン・レイ、アンドレ・ブルトンといったダダやシュールレアリスムのアーティスト達は、ファウンド・オブジェ、無意識の開拓、科学・機械美への傾倒等に見られるように、日常のなかからアートへの飛躍を見出した。とはいってもパレでのマーク・オリヴィエの試みは、とくに歴史に源泉を求めているわけではなく、またいまの創造を歴史化する行為でもなく、むしろ歴史にシンクロする行為と見てとれるだろう。

アートと日常性とのコラボレーションとでもよばう

か、日常性、凡庸なもの、雑多なものが新しい創造への刺激となり、歴史と共振することによって、作品、展覧会、パレ全体のプログラムの解釈の幅を広げて、深みを与える。それは決して、アートを親しみやすく・分かり易く見せるためではなく、むしろいくつもの筋を束ね締めで複雑化することによって、アートの力を増幅させる行為である。

パレ・ド・トーキョーが、パリにあってコンテンポラリーアートの殿堂ではなく、開放的な創造の場としてあることは、実は観客である我々も「いま」の創造に加担しているという密かな悦びを味わえるスリリングな場所としてあることを示唆している。パリに着いてカフェで一息ついたあと、いまここで何が起こっているか、ここでなにが創られようとしているのか、この眼で確かめ、肌で感じるには、複眼的に、織物の縫を織り込むように、アートとあなたの身のまわりを見渡すといいだろう。

バレ・ド・トーキョー改修計画

バレ・ド・トーキョーは、1937年に開催されたパリ万国博覧会の会場として建設された。その後様々な用途に転用されながらも近年ではがらんどうの箱となっていた建物は、1999年に行われた設計競技の結果、フランスの建築家アンヌ・ラカトンとジャン＝フィリップ・ヴァッサルの手によって、2002年、コンテンポラリー・アートのための美術館として再生された。まるで倉庫か工場を思わせるコンクリートの床、粗く塗装された壁、剥き出しの鉄骨、設備のダクトが天井を交差する大空間は、現在、「現代的創造活動の場」として広く開かれた場所となっている。

設計者にとって、簡潔で明快な設計をするということは、実はとても難しく手間のかかる作業だ。特に様々なプログラムが要求される美術館建築においては尚更のことである。しかし、ラカトン＆ヴァッサルは、バレ・ド・トーキョーの改修計画においてそれを見事に実現している。バレ・ド・トーキョーには、例えばカルティエ現代美術財団のような洗練された繊細さや、昨年6月のオープン以来連日長蛇の列をなすケ・ブランリー美術館のようなダイナミックな迫力、あるいはパリ市内に数多く存在するいわゆる観光名所的な美術館のモニュメンタルで強烈な印象はない。しかし、訪れる人々が思い思いの時間を過ごせる、ゆるくて生き生きとした自由な空間がある。

散歩の途中でふらりと併設の本屋（かなり偏りはあるが、独自の視点で本を揃えていて結構面白い）に立ち寄って周りを見渡せば、階下に見下ろすカフェでは学生風の若者が本を読みふけり、隣のレストランでは早めのアペリティフを楽しむ人々が会話を興じている。展示スペースの一角では次回の展覧会に向けて作品の設営が行われ、それを訪れた人々が覗き込み、奥では参加型の作品の中で子供たちが跳ね回っている。そうかと思えばただのんびりとひなたぼっこをしているだけ、なんて人っている。バレ・ド・トーキョーは、何と言うかパリの街角の風景が自然に集まってきたような、およそ今まで私たちが知っている「美術館」らしくない場所なのである。

広場をつくる

バレ・ド・トーキョーの改修において、ラカトン＆ヴァッサルは新たに加える要素を最小限に抑え、空間が元々持つポテンシャルを最大限に活用した。仕切りのない大空間、およそ8mもの天井高、自然光がふんだんに降り注ぐトップライト。以前に行われた内装、設備の解体工事によって固らずも確保された透明性をそのまま利用したのだ。初めてこの場所を訪れた時、仕上げだけを見ればまるで倉庫のような印象に驚いたものだが、良く観察すると空間を抑えて余白を残した建築家の意図が読み取れる。

ラカトン＆ヴァッサルが作る建築の特徴は、建物の

竣工が「作品」の完成ではなく、そこで人々が活動し、賑やかな生活の要素が持ち込まれることで、さらに生き生きとした空間が現れてくる、ということにある。彼らの建築には、強い造形性や作り込んだ仕掛けはない。あくまでシンプルで、カジュアルで、軽やかで、明るい。しかし不思議に端正で、むしろ詩的な印象すら与える。その絶妙なバランスが彼らの建築の醍醐味であり、フランスのみならずヨーロッパの若手建築家や学生たちから大きな支持を得ている理由だろう。

彼らは、バレ・ド・トーキョーの改修計画を提案するにあたり「広場」というイメージを提案した。すなわち、ニュートラルな大空間でイベントが発生しては消え、人やモノの動きと密度が常に変化していく舞台をつくることを目指したのである。だから、バレ・ド・トーキョーを訪れると、見る側と見る側という一方通行の関係ではなく、皆がバレ・ド・トーキョーという広場を構成する要素になる。乱暴なことを言ってしまえば、ここへ来たら展覧会なんか見なくたって好きに過ごせばいいのだ。バレ・ド・トーキョーは、皆が参加できるアートの実験と創造の場なのである。



© Philippe Ruault

Anne Lacaton Jean-Philippe Vassal

E T

Text_MIHO NAGASHIMA



Philippe Ruault



『BEFORE(PLUS IN MOINS)』展 MAY 24-JULY25 2007
Andy Warhol, Electric Chairs, 1971 / Collection Frac Nord-Pas de Calais. Photo : © Galerie D. Templon.



『BASTARD CREATURE』展 MAY 24-JULY25 2007
Banks Violette, Kill Yourself (Twin), 2006 / Courtesy Collection Migros Museum für Gegenwartskunst Zürich. photo: A. Burger, Zürich



『BASTARD CREATURE』展 MAY 24-JULY25
1994 / Courtesy of the Artist
Michael Lavine, Courtney Love Kneeling, 2007



LA MARQUE NOIRE

黒標—スティーブン・パリノに捧ぐ

Text_AKIKO MIKI



『STEVEN PARRINO RETROSPECTIVE 1981-2004』

MAY24-AUG26,2007

(上) Steven Parrino, exhibition view, CAN, Neuchâtel, 1998. Photo : Joël Von Allmen.
(右) Performance by Steven Parrino Electrophilia with Jutta Koether. Black Bonds exhibition, Swiss Institute - Contemporary Art, New York 2002.

昨年、新館長が着任したバレ・ド・トーキョーでは、彼の指揮によるプログラムラインが9月より始まった。その第一章「50億年」は、「伸縮性」をテーマに長い時間や偶発性の問題を扱い、第二章「M/反転した世界からのニュース」は、対立する極の間の振動に照準を合せ複数の個展・グループ展で構成されたが、今回はプログラム全体をスティーブン・パリノという一米国人アーティストに捧げている。

2005年1月元旦、NYブルックリン橋でバイク事故による衝撃的な死を遂げたパリノの活動は国際的にはあまり知られていない。だが、その革新的な絵画表現の追求、特に異分野やメディアへの積極的な取組みや、カテゴリー／社会規範／ヒエラルキーを超えて、コラボレーションのプロセスを制作の核として多くの新旧異なる才能と関わることで創造活動を発展させていった点などから、彼の死後、改めて注目を集めるようになっている。

70年代末/80年代初頭の「絵画は終わった」という巷の空気のなかで、パリノの選んだ絵画の取り組みは、その後台頭することになる超表現主義的な方向等とは一線を画すもので、それは、ときに「絵画の死とともに生きる」と喩えられるような、絵画の破壊とモダンアートの歴史／アメリカンポップ文化からのアプローチの戦略によって、前衛ナレティブの

歴史的な断絶を再生しようとする試みだった。

歪められ、破られたキャンバス地が、壁に立て掛けられたり床に積まれたりして異様なフォルムを呈したパリノの絵画。エンジンオイルや工業エナメルペイント（ジャッドの使用した有名なハーレーダヴィッドソン用の塗料とか）、血などの媒体も用いられ、多くは壊れた事故車や工事現場に残された廃材、噛み捨てられたチューインガムのよう。ある動作・エネルギーの視覚的な具現化を目指して、作家はパフォーマンスベースでの制作も頻繁に行なった。一方、デッサン、コレージュ作品では、ラモーンズらのパンクロック、ノーウエーブ、ヘルズエンジェルなどのモチーフの直接的な引用が目立つ。ユッタ・コッターとともに「Electrophilia」名で音楽活動をしていたことからも、レイモン・ペティボンとの関係を想起させなくないが、パリノの世界は、より悪趣味でアンダーラインアーティストの世界観を想起させる。

本プログラムは三部構成で、1981年—2004年に制作されたパリノの代表作約百点を集めた回顧展を中心に、『BEFORE (PLUS OU MOINS)』と『BASTARD CREATURE』という二つの展覧会も同時に開催。前者は、パリノに影響を与えたアーティストたちの作品を通して、パリノ芸術、美学の起源を探るもので、ウォーホルの電気椅子やステラのブラックペインティ

ング、アコンチが地下室でバットを振り回す異常に凶暴なパフォーマンスビデオから、スマッシュの初期のレアな彫刻作品、さらにはケネス・アンガーの魔女信仰にまつわる映画『Invocation of My Demon Brother』等の歴史的作品をフィーチャー。ちなみに、本映画のオリジナルサウンドはミック・ジャガーによるが、ここでは『Electrophilia』が本映画のために特別に作ったサウンドが代わりに流される。まるで、『ルシファー・ライジング』のジミー・ペイジの音楽がボビー・ボーソレイユの獄中録音楽に代わった有名なエピソードをなぞるかのように。

もう一方の企画は、パリノの他作家との積極的な共同制作や若手作家へのサポート、交流活動に注目し、生前に彼自身が企画した二展を再構成したもの。暴力、セックス、アンダーグラウンド、アウトロー、ポップ・カルチャー等のエッセンスの凝縮されたマイケル・ラヴィーン、エイミー・グラナット、バンクス・ハイド、マイ・チュ・ベレ、リチャード・カーンらの作品を通して、パリノが信じ、そして彼がこれらのアーティストたちの活動に見ようとした、文化の極限を探し求める姿勢とアートのラディカルな可能性について考える。なお、これら展覧会だけでなく、Cinema Zero、ビーター・サヴィル、メルツバウラの講演、ライブといった関連イベントも予定。

KOKI TANAKA 田中功起

Setting  and Taking Down and more



「Setting Up and Taking Down / 立てることと倒すこと」展示風景
モジュール、パレ・ド・トーキョー、パリ、フランス（2007年3月1日から4月1日）



KOKI TANAKA, *Underground of Palais de Tokyo* 2007 type-c print dimension variable

ぼくがパレのスタディ・プログラムにいたときはちょうどディレクター交替の時期でした。ジェロームとニコラのあとを受けてマーク・オリヴィエになり、ディレクションが大きく変わりました。以前のパレが間鍋だったとすると、いっぺんボタージュ・スープになった印象です。雑多で獨裁でなにが飛び出すかわからないカオスのようなアートセンターが、整然となり、ロゴもドット・フォントから、ゴシック体のきっちりしたものに変わったりして。とはいえそのボタージュの底には彼の一貫したコンセプト（作品とはビースとして結実したものとはかぎらないし、かならずしもアーティストが作ったものだけがアートであるわけでもない）が隠れているわけですけど。

ぼくはモジュールという若手を紹介するスペースで個展をしたのですが、そこではパレのなかからいくつかの家具（テーブルとかソファとか扉とか）や備品（段ボールとか脚立とかゴミ箱とか）を展示スペースに持ち込み、それを立てて、ボーリングのボールで倒す、という一連のアクションを映像とともにインスタレーションしました。つまり結果（インスタレーション）だけが完結した作品というわけでもなく、かといって過程（映像）だけが作品というわけでもなく、つねにどこかが欠けている状態が提示+維持されている、というものです。

一年弱のスタディ・プログラム（「Le Pavillon」という名称）のなかではウシュアイア（アルゼンチン）で氷河を鑑賞し、ニベアとの共同プロジェクトのため工場見学をし（試供品をたくさんもらひ）、本を作るプロジェクトのためにベルギーの印刷屋さんと打ち合わせをし（予算的にできないと言われ）、坊主頭に角をつけてトーケ・ショウをするはめになったりしました。そこではコラボレーションをベースにいかに経験を拡張するかということに焦点がおかれ、いやもうなくぼくの感覚は開かれたようになります。おかげとしてはポーランドの山奥で7時間もさまようなんてことも経験しました。

1975年生まれ。04年アジアン・カルチャーラ・カウンシルの助成によりロケーション・ワンに参加、ニューヨークに滞在。05年 東京藝術大学大学院美術研究科修士課程修了。05-06年ボーラ美術振興財団の助成およびフランス政府奨費留学生としてパヴィリオン（パレ・ド・トーキョー）に参加、パリに滞在。先頃、初作品集を上梓。



右写真は上から、プログラム参加アーティストのWagner Moralesとの組み、エル・カラブリナ（アルゼンチン）で見た氷河、ウシュアイア（アルゼンチン）で「Koki Tanaka Show」開幕中の（Wagner Morales & Romualdo Sain）、パレの中国でPavillonのアーティストたち。
[Le Pavillon] の正式名称は Le Pavillon, art research laboratory of the
Palais de Tokyo, Paris.

パリ万博に建てられた Palais de Tokyo、1937年

アートセンターになった Palais de Tokyo、2001年

magic village があらわれた Palais de Tokyo、2004年

日のあるとき

すべての空間に光が差し込む Palais de Tokyo

その光はいつもと同じところからやってきて

同じ窓と天窓を通じ同じ壁に当たって反射する

記憶の重なりに光が屈折して輝く

静かに magic village があらわれた

天井から注ぐ天然光、
雲の移りとともに光りの動きの様も見える。
そんな視線の先の目の前を、
どこからともなく入り込んできた鳥が
自由に横切っていったりする。

ライトグレー、イエローグリーン、パープル、
ホワイト、それぞれ単一の色にわたる、
4つの景色にあらわれた magic village。
展示には2つの構成を持った。

その村の住人たちが佇む風景と、
誰ひとりいない村の光景。
誰が残していったのか、静かにそこに置かれた景色に、
永遠といわんばかりの光が映った。



magic village
pyramid tent, dress lens, rope, frp wood,
plastic plants, cotton sheet
dimensions variable
Installation view, Palais de Tokyo, Paris, 2004



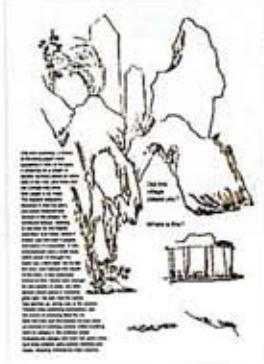
magic village
pyramid tent, rope, frp wood, plastic plants, cotton sheet, dimensions variable
Installation view, Palais de Tokyo, Paris, 2004



magic village
pyramid tent, rope, frp wood, plastic plants, cotton sheet, dimensions variable
Installation view, Palais de Tokyo, Paris, 2004



magic village
mountain tent, rope, frp wood, plastic plants,
cotton sheet
dimensions variable
Installation view, Palais de Tokyo, Paris, 2004



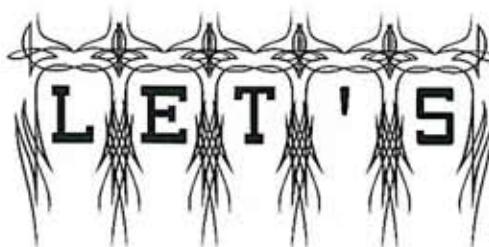
magic village
ink on paper, text and drawing

COSMIC WONDERとは、単独での作品制作を平行するアーティスト Yukinori Maedaによる、定期または不定期によるプロジェクト名。(1998年から2006年までの間、発表されたCOSMIC WONDERによる計19作品のうち、パレドトーキョーでの2作品を含む15作品をパリにて発表。) 作品はインスタレーションとパフォーマンスによるもので、立体、絵、映像、音楽等、それぞれの要素が平等に交わり最終的に一つのイメージを構成。(なお、2007年より、これら一連のCOSMIC WONDERとしての活動領域より独立し、具体的に空間表現を追求するファッションプロジェクトとしてCOSMIC WONDER Light Sourceが源生。)

COSMIC WONDER
コズミックワンダー

magic village

Palais de Tokyo



LET'S ENJOY

Text & Photography_TOMOMI KURISU



Black Block _ブティック

Tél +33 1 47 23 37 04
www.blackblock.org Contact : blackblock@free.fr

昨年青山にオープンした会員制クラブ le Baron de Paris のオーナー、アンドレがパリで初めてプロデュースしたのがパレ・ド・トーキョー内の Black Block。彼はグラフィティアーティストとしてパリ中の壁を席巻したのち、ブティックやクラブ、ホテル経営にも乗り出すなど、今やパリのハイブなカルチャーシーンで欠かすことのできない存在となった。

デザインからコンセプトまで全てを手がけた Black Block で売られているものは、本人が世界中から集めたものと、アンドレグッズ、そしてアーティストの限定プロダクト。バッグからTシャツ、スニーカー、CD、バッジなど、ここに来ないと買えない一点もの、限定ものばかり。それらのおもちゃが、冷蔵庫のよう



なショーケースに上品に置かれている。大きな壁面と中央の台では Black Block 主催のミニ展覧会が行われる。多忙な今でもアンドレはパリにいれば必ず立ち寄るという。

パレ・ド・トーキョーが既成のアートに限らず、ジャンルを超えた新しいアートを提示する空間であるとすれば、まさにブティックの経営者としてアンドレを採用したのは正解。本人のみならず扱ってる商品のどれもが、アート、音楽、ファッション、デザインに限定されないハイブリッドな活動をしている面々だからだ。ここにくればパリのカルチャーシーンの匂が一目瞭然。0時までオープンしているので近所の本家 le Baron に行く前にチェックしたい。



Tokyo Eat レストラン

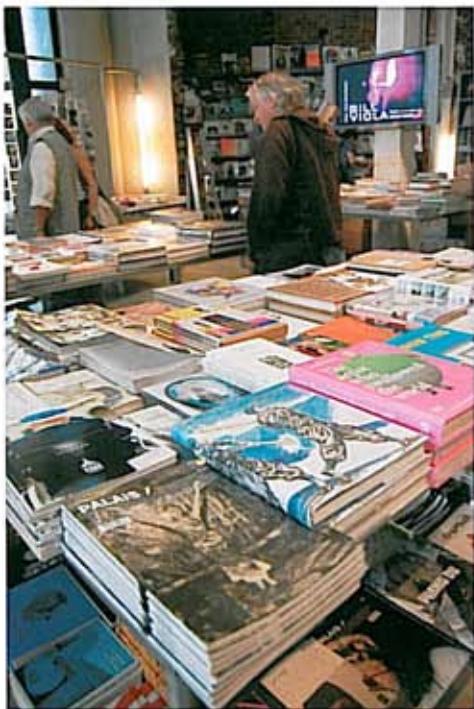
Tél +33 1 47 20 00 29

現代アートの展示を見た後、古き良きパリのピストロではなくてもうちょっとアートな余韻に浸りたいなら、併設のレストラン・バー、Tokyo Eat へ。広々とした空間に、イヴァン・ファイヤードの丸テーブル、アンドレ、ゼウス、コルコズなど、デザイナー、グラフィティアーティストがデザインしたポップな椅子が並ぶ。ピンクとブルーの UFO みたいな巨大ランプと2人でも利用できる（！）遊び心満載のトイレは建築家ステファン・モーバンの設計。

オープンキッチンの奥でシェフのティエリー・バッサー氏が作る料理は、牛ホホ肉のボトフやタルタル、子羊のローストなど伝統的ビストロ料理だけでなく、スペイスや珍しい野菜をアクセントにした創作フレン

チも。旬の野菜をふんだんにとりいたれた料理が楽しめる。アペリティフから前菜、メイン、デザート、コーヒーまでメニューは豊富だが、もちろん単品でもオーダーできる。ランチは12時から15時、ディナーは20時から23時30分まで、バーの利用は1時まで。美術館併設のレストランでこんなに遅くまで営業しているところも珍しい。

天井が高く開放的で落ち着いた空間なので昼のビジネスランチなどにも利用されているが、ディナータイムになると中2階のユーモアたっぷりのトイレの奥にDJが入る。夏はセーヌ川が見えるテラスでの食事もできる。ここなら、のんびりと美術鑑賞をした後においしい食事を堪能し、楽しく一日を締めくくれるだろう。



La librairie 本屋

Tel : +33 1 49 52 02 04
lalibrairie@palaisdelotkyo.com



Tokyo Idem カフェ

Tel. +33 1 47 20 00 09

パリのカフェで困るのがギャルソンのベースで注文、支払いをしなくてはならないこと。忙しい時間はかなり待たれてイラライラしてしまう。でもパレ・ド・トーキョーのカフェ Tokyo Idem はセルフサービスなので急いでいても時間がある時も好きなだけ休める。フランス語が全然ダメでも心配ない。やり方は万国共通。食堂式でお盆に好きな物を乗せてレジでお金を払うだけ。メニューはサラダやデザート、サンドwich、コーヒー、ジュースなどの軽食。熱い飲み物はレジの人に言うとその場で出してくれる。ネクターといって、砂糖が入っているがいちごやあんずなど日本では珍しい味のジュースもある。夜軽く一杯やりたいときにはビールなんかもある。



セルフサービスなので空いている席に座ればいい。食堂っぽい雰囲気の大きなテーブルとベンチや窓際のデッキチェアのような椅子などいろいろ。テレビが置いてあり、展示内容やイベントの告知をチェックするもよし。おすすめは階段を降りてすぐの椅子。壁にもたれて座れば向かいのパリ市近代美術館のクラシックな建物の前でスケボーワークの練習をする若者を観察できる。夏場はテラスを開放しているのでセーヌ川をみながら気持ちよく一休みも可。本を持ち込んでコーヒー一杯でのんびりと読書をしているフランス人もいれば、話に熱中しているカップルもいる。美術館併設のカフェというより、自分の家のように気軽に利用できるのがこのカフェの特色なのかもしれない。



などに最適な雑貨類も所狭しと置かれている。

こだわりは、今のカルチャーシーンがすぐキャッチできるセレクト。なかでも話題のアーティストの作品集や評論集もバッと目につく場所に置いてあるし、表紙をざらりと並べた雑誌コーナーにも目を奪われる。店内を一周するだけでパリの今がだいたい把握できてしまう。気になったらバラバラと立ち読みしてもいいし、欲しいと思ったら購入してもいい。買い物をするとパレ・ド・トーキョーの初代デザイナー M/M paris によるピクセルアートの袋に入ってくれる。運くまでやっているので、友達のプレゼント、今夜のパーティの音楽や寝る前に読む本探しと利用価値大の本屋なのだ。

